



中学校部会会報

全日本音楽教育研究会

平成27年3月3日発行 通算第69号

全国大会を終えて

全日音研全国大会 東京大会 小・中学校部会大会 会長 菊本 和仁

(東京都中学校音楽教育研究会会長・墨田区立桜堤中学校長)



平成26年11月6日・7日に府中の森芸術劇場で開催しました平成26年度全日本音楽教育研究全国大会東京大会(小・中学校部会大会)に、全国各地からたくさんの方々にお越しいただき、大きな成果をあげて無事終了することができました。今回は、東京都小学校音楽教育研究会と東京都中学校音楽教育研究会が互いに手を取り合い、大会主題『つげよう 深めよう 思いをこめて』のもと、小・中合同の授業研究会を発足させて、小・中の連携・接続を視野に入れ、数多くの研究・研修を実施しました。

本大会の1日目は、各ホールごとに分かれ、「歌唱」「音楽づくり・創作」「鑑賞」の小・中の連携した研究授業をご覧いただき、研究協議会では活発な意見交換ができました。また、シンポジウムでは、テーマ「生涯にわたって音楽を愛好する童・生徒の育成を目指して」として、研究協議会で見えた成果や課題等を報告するとともに助言者の先生方からもお話をいただきました。2日目の研究演奏では、小中一貫校による和楽器の合唱奏、小学校の器楽合奏、小中連携による歌唱や合唱、中学から高校への接続を意識した混声合唱、そしてフィナーレへと、児童・生徒が日常的な授業での音楽活動の延長にある演奏を通して学びの連携・接続の大切さを伝えることができました。これからも小・中の連携を深め、さらなる研修・研究を進めていきたいと思います。

結びに、本大会の開催にあたり、文部科学省初等中等教育局教育課程科調査官の津田正之先生、臼井 学先生をはじめ、多くの先生方や関係機関の方々に深く感謝の意を表し、全国大会を終えてのごあいさつとさせていただきます。

静岡大会に向けて

全日音研静岡大会実行委員長 静岡県支部長 伊藤 静雄(静岡市立清水第四中学校長)



全国の会員の皆様、いよいよ全国大会(総合大会)静岡大会(10月29日、30日)を開催させていただく年を迎えました。全国から多くの皆様がご来静くださることを心よりお願い申し上げます。

さて、私たち静岡県教育研究会音楽教育研究部では、50年に渡り研究交流と絆を深めてきました。これまでの取り組みは拙いものですが、全国大会をお引き受けするにあたり、今まで開催されてきた総合大会や各部会大会の成果と課題をつなぎ、静岡での研究を添えて皆様にお届けし広めることを使命と捉え取り組んでいるところです。

大会主題は「ひろがれ音楽 つながる心」としました。静岡県において、今まであまり連携ができていなかった小・中、高校、大学それぞれの部会が、情報交換や研究実践での連携を深め、研究を進めていることも一つの成果としてお伝えしたいと考えております。

静岡大会では、1日目の会場を駿府城址(公園)に隣接する「静岡市民文化会館」を中心に徒歩5分圏内に会場を配置しました。2日目は、JR清水駅からアクセス抜群で音響が自慢の「清水マリナート」で行います。2日間を通して、会員の皆様のご負担少なくご参加いただけることと思います。また、ちょっとした移動の際には、温暖の地静岡ならではの秋の風情や富士山の英姿などを楽しんでいただけることと思います。

本大会をとおして、全国の皆様と研究の成果を共有し、活発な情報交換、意見交換をすることが、これからの音楽教育の発展と子どもたちの充実した学びへとつながっていくことを願っております。

静岡市では大道芸世界大会(ワールドカップ in 静岡)が11月1日(土)から駿府城址(公園)をメイン会場に開催されます。準備が始まる29日(木)、30日(金)には、街角でパフォーマーが皆様をお迎えしてくれることもあるかもしれません。多くの方々の皆様のお越しを心よりお待ちしております。

Contents

- P 1 全国大会を終えて 菊本 和仁 / 静岡大会に向けて 伊藤 静雄
- P 2~3 全日音研全国大会 東京大会講評
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官
津田 正之 氏 臼井 学 氏
- P 3 シンポジウム
- P 4~5 東京大会《小・中学校部会大会》 研究授業レポート
- P 6 全日音研東京大会研究演奏・Information

発 行

全日本音楽教育研究会 中学校部会
東京都台東区上野桜木 1-14-55
台東立上野中学校内
会長 小松 康裕

◆ 講演評 ◆

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官
文部科学省初等中等区教育局教育課程課 教科調査官

津田 正之 氏 白井 学 氏

日時：平成26年11月7日（金） 10:50～

場所：府中の森芸術劇場（どりーむホール）



津田調査官講評（要約）

今回の東京大会は、小学校、中学校、高等学校一堂にそろった研究演奏の基盤固め、そして校種間の連携を図ったカリキュラムを作っていくという前回の課題を、見事に研究成果として発信された大会だったと思います。

現行学習指導要領の主旨を生かした指導をさらに充実していくことが期待される時期に、全校各地から小中学校の音楽科教育に関わる皆さんが一堂にそろう、基調提案、研究授業、シンポジウム、研究演奏などを通して、音楽教育のさらなる改善充実に向けて理解を深められたことはまことに意義あることでした。東京大会の運営と研究に尽力され、そして意義ある発信をされた東京都の小中学校の先生方の熱意ある取り組みと、助言の先生、そして全日音研に関わる先生方をはじめ、東京大会を支えてくださった皆様に心から敬意を表します。

今大会では、義務教育9年間を見据えた研究を学習指導要領の主旨を生かして共通の視点を持ち、小学校、中学校それぞれの校種において何を大切にすべきか、そのことについて具体的な提案がなされました。その研究の在り様は、とりわけ義務教育全体を俯瞰したカリキュラム、各題材の授業を充実させる ACSW 表の提案、これらは今後全国各地において小中連携を図ったカリキュラムを構築する際、一つの重要なモデルになると考えられます。そしてこの提案を真意あるものにするために、学習指導要領の内容の確かな理解とともに、高まった子どもたちの姿、そしてそのための指導の手立てを指導案等において非常に具体的に描いており、小学校において、中学校の授業を見据えることによって今小学校のこの段階で何をどのように指導すべきなのか、そのことを明確にしていくことが小中連携を図る上で大切な意味となります。

こうした点を踏まえて小学校の取り組みを、研究授業を中心にお話させていただきます。

4年生「旋律の重なりを感じ取る」の歌唱の授業でした。第一は子どもたちの体が実にしなやか、そして心と体が解放されていることの重要性です。第二は、自分の力で音程をとらえている力、いわゆる階名唱などの大切さです。第三は、声が重なって美しいハーモニーがはまった楽しさ、喜びを何よりも大切にされているということです。第四は、楽譜を読むことを大切にしている点です。このことは、中学校において声部の役割と全体の響きとの関わりを理解して表現する子どもの育成に生かされていくことがよく見えるということにつながります。

6年生の音楽づくり「いろいろな音階を使って音楽をつくろう」の授業です。第一は、音楽を作る手法を学びそれを生かして表現することの楽しさや意味についてです。第二は、即興的に音楽をつくる過程やそのことを共有する過程において、音や音楽の特徴を感じ取ること、そして作る音楽のイメージをふくらませることを大切にしていることです。クリエイティブな多様性を尊重する態度の育成がこれからの子どもたちが必要とされる資質能力のひとつとして非常に重要なことと考えられ、そのような力の育成に音楽づくりが大きく寄与することも、子どもたちの姿から実感しました。

次に鑑賞の授業についてです。4年生の「いろいろな民謡に親しもう」の授業では、生活とのかかわりを感じ取りやすい楽曲を、授業においてどのように取り扱って鑑賞するのか、という点についてとても示唆的な実践でした。第一に比較の視点を取り入れたということです。第二は、民謡が歌われたその地域の生活とのかかわりから音楽の特徴を引き出していく教師の手立てが見事でした。小学校において我が国の音楽の特徴をしっかりと学ぶことが、中学校において音楽の多様性を理解して鑑賞を深めることの支えになる、二つの実践をつなげてみることで非常にわかりました。音楽を学ぶことは、その音楽が生まれた地域の人間の生き方そのものにもつながり、実はそのことが、なぜ学校で音楽を学ぶのかという問いに対する一つの答えではないか、私は鑑賞部会の授業と研究を拝見して実感したところです。

本大会では小中すべての授業や研究演奏において、先生と子ども、子ども同士のつながりが音楽学習、音楽表現の深まりにつながっていました。そのことこそが全国の先生方への大きなメッセージだったと思います。私どもも小中の調査官がしっかりつながりをもって仕事を進めたいと考えております。素晴らしい研究を進められた先生方に重ねて敬意を表して小学校部会を中心とした講評とさせていただきます。

白井調査官講評（要約）

現行学習指導要領では、小学校、中学校9年間の音楽科の一貫性を項立て、内容様々な面においてよりわかりやすく示しております。そのことを受けて全国の中学校で、小学校の学習を十分に生かすことによって、中学校音楽科における学習の一層の充実を図ろうとする取り組みがみられております。しかし、まだその取り組みは十分とはいえない面もあるのかと思います。そのような傾向を考えた時、本大会の研究、また昨日の授業研究会等は大変意義あるものであったと思っております。

本大会を迎えるにあたって何回か中学校部会の研究会に参加させていただきました。そこでは小学校部会の先生も参加され、小学校と中学校の学習のつながり、小学校と中学校の学習の共通点と相違点、また題材間の関係性等を大切にした議論が行われておりました。小中のつながりや題材間のつながりを大切にすることは、児童生徒の意識のつながりや学びの連続性を大切にするということであり、そのことの具体が今大会

の学習指導案にいていねいに記述されています。

それでは公開授業のことについて少しふれさせていただきます。

まず「歌唱」山田先生の授業です。本時をむかえるにあたって山田先生が最も大切にされたことは、生徒が上手に歌えるということではなく、生徒が主体的に創意工夫し、いかに自分たちの歌唱表現を創り上げていくかということでした。生徒の歌声そして歌う姿の素晴らしさが強く印象に残った先生も多いと思いますが、この授業で学んでいただきたいことは、その生徒の姿に至る過程で、どのような授業研究が行われてきたかということです。生徒が見事に育っており、山田先生の優れた指導力が垣間見えるという生徒の姿であったと思います。全体を通して言葉だけでなく、歌だけでもない、その両方が充実して相乗効果がある、そういった授業実践であり、創意工夫と技能の習得がきわめて密接な関係にあるということを授業の具体的な姿で示していただきました。小学校も中学校も、歌唱の授業では楽譜を大切に扱っている場面もみられました。また、小学校では子どもたちがとらえにくいところをうまく視覚的にとらえられるように、図で示すなどの部分がありました。このようなところは、小学校から大切に生きてきて中学校に生きているまた一つのつながりであったと思っております。

続いて創作の今井先生の授業です。今井先生は、これまで継続的に授業の始めの時間を使って短時間の創作活動を行ってきいているとうかがっています。生徒はその過程において、創る方法や創って演奏する楽しさを経験してきています。その上で自分のイメージを大切に音楽的な特徴を生かした創作を行っているのです。よく創作の授業では、教師側のプランとしては、ここで修正をさせたいという活動を仕組む場合がありますが、その時、子どもたちが修正の必要感をもっていないで、そもそも修正ありきというような授業プランになってしまっていて、子どもたちは何かをやっているが本当に変えたいと思っているのかどうかという微妙な場面が時々あります。要は何かを追及していく時に必要感が子どもたちにもてるような手だてが途中にきちんと入っていることが非常に優れていました。また、生徒たちの活動で、知覚と感受が子どもたちの中で両方きちんと働いている状態がみられ、創作の授業が成立している点が大変素晴らしいと思いました。

最後に鑑賞の勝山先生の授業です。この授業は音楽文化の理解、多様性に真正面から取り組んでいただいた授業でした。学習指導案に書かれている、「生徒にとってそれまで未知であった諸外国の音楽に対して生徒の中に新たな価値が生まれる」という新たな価値に注目したいと思えます。多様性の変化は、知識の量や扱う教材の種類が多さによってなされるものではない、生徒がこれまで自分のもっていた音楽に対する価値観の枠を広げ、再構築していくことによってなされるものだと思います。例えば、耳慣れない音楽に出会い、始めは不思議な音楽だな、いつも聴いている音楽とちがうな、と感じていた生徒が、例えばこの題材においても、学習を通して自分の音楽の聴き方が変わっていく、そしてその音楽の価値を自ら判断して良さを生み出していく、ここに音楽文化の理解または多様性を大切に鑑賞の授業の意図があるのではないかと思います。授業の中では、テクスチャの知覚、感受につなげるために図を使用し、「なぜ音楽はうまれたのか」という問いに迫っていくだけではなく、この問いについて考えた上で、最後にその曲をちゃんと聴き味わって、鑑賞の学習として終結したというところが、この題材のまた優れた点だと思っております。

さてこの会場には全国から実践者として、また指導的なお立場として、また研究者として音楽教育に真摯にかかわっておられる先生方が一堂に会しておられます。本大会の成果をご参会の皆さんがご自身の立場に立ってとらえ、明日からの音楽教育にそして未来を担う子どもたちのために活かしていただけますことをお願い申し上げます。私たちの研究や研修は、授業がなければ、またそこに子どもの姿がなければ成立しません。大会にあたり、様々にご理解ご協力いただきました関係校の校長先生はじめ、教職員の皆さま、保護者の皆さま、そしてなによりも慣れない環境の中で日頃の学習の成果を発揮し生き生きと音楽と関わる姿を見せてくれた児童生徒の皆さんに心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。またこのような素晴らしい機会を設定していただきました、大会会長、菊本和仁先生をはじめとする実行委員の皆さん、授業者の先生方、心より敬意を表すものでございます。本大会の成功に対してお祝いを申し上げますとともに、ご参会の皆さまの一層のご活躍をご祈念申し上げ講評とさせていただきます。ありがとうございました。

平成26年度 全日本音楽教育研究会全国大会 東京大会 小・中学校部会大会

◆シンポジウム◆

テーマ「生涯にわたって音楽を愛好する児童・生徒の育成を目指して」

日時：平成26年11月6日（木）15：20～16：30



- <第1部> 研究協議のまとめ 研究部長・副部長より、研究協議会での話題や流れについて報告がありました。
- <第2部> シンポジスト：
- *伊野 義博 先生 (新潟大学教授)
 - *石上 則子 先生 (東京学芸大学特任准教授)
 - *工藤 豊太 先生 (東京音楽大学准教授)

工藤先生からは、本日のように授業で「合唱」に取り組む際の留意点についてお話があった。また、石上先生は、音楽づくり・創作分野について、この日お見えになる予定だった坪能由紀子先生（日本女子大学教授）からのメッセージを代読された。学校で音楽に取り組む意味についても言及された。最後に伊野先生からは、鑑賞分野について、スライドを使って小学校・中学校の関連や連続性や、我が国の伝統音楽を学ぶ意義などについてお話があった。短い時間の中で、音楽科の様々な課題に触れ、有意義なシンポジウムであった。

◆研究授業レポート◆

日時：平成26年11月6日（木）

会場：府中の森芸術劇場 ウィーンホール・ふるさとホール・平成の間

大会主題 『つなげよう 深めよう 思いをこめて』



【歌唱】小学校・第4学年

題材名 「旋律の重なりを感じとろう」

教材名：「たんぼぼのバッジ」

指導者 府中市立府中第二小学校主任教諭 加嶋 千秋

初めて合唱に取り組む4年生。授業のはじめに振り付きの「ゆかいに歩けば」を歌っていたのが印象的だった。色々な速度に変えて繰り返し歌い、「速度」を体得する学習にもなるといった。その後、「たんぼぼのバッジ」の一部分「きらりと～光るでしょう」を取り出し、主な旋律と副次的な旋律を合わせるグループ練習を行った。各グループには、指揮者、鍵盤ハーモニカ担当（音取り）、アドバイザーの3役がいて、活発な活動が展開された。グループで試行錯誤しながら繰り返し練習する中で、旋律の重なりを感じ取りながら歌う意識が高まっていく様子を感じられた。また、授業者の問いかけに、児童たちから「音が重なり合うとすてき、美しい、もっと声が響く」などの発言、気づきがあり、最後には一人ひとりの思いが込められた歌声が会場に響いた。



【歌唱】中学校・第2学年

題材名 「声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解し、表現を工夫して歌おう」

教材名：「時の旅人」

指導者 品川区立鈴ヶ森中学校主任教諭 山田 泰子

「時の旅人」の最後の部分「ぼくらは旅人～」を取り上げ、担当グループから自分たちが考えた音楽表現の工夫について意見を伝え、その表現の工夫を試して歌ったり、意見を言い合ったりしながら、生徒同士が学び合い、クラス全体で合唱を作り上げていった。生徒の意見はすぐに取り入れて実践させる等、指導者の適切な指示やアドバイスでテンポよく授業が進められた。「ぼく ぼくらは～」の部分では、生徒から「トンネルの中で反響している感じ」「心の中のトンネルを抜けたところに明るい希望の光（明るいハーモニー）が差し込む」などの意見が出てイメージをふくらませていった。楽曲をより深く理解することにより、自分たちの思いと作曲者の思いが重なり、表現豊かで感動的な合唱に変容していく過程がよく見える有意義な授業であった。



【音楽づくり・創作】小学校・第6学年

題材名 「いろいろな音階を使って音楽をつくろう」 ～音階から切り取った音でつくる～

教材名：「Song from π」 aSongScout 作曲

「BACHによる6つの変奏より フーガ」 リムスキー・コルサコフ作曲

指導者 小平市立上宿小学校教諭 半野田 恵

鑑賞（数字や名前をもとに作曲された楽曲の特徴を感じ取る）から作曲の手法を学び、本大会の日程「1167」（11月6日、7日）をハ長調、イ短調、ドリア旋法の音階に当てはめて音楽づくりをするという学習だった。イメージをふくらませながら音や音楽の特徴を感じ取り、音楽の仕組みを生かしながら、楽しそうに音楽づくりをしている様子であった。自分で旋律をつくり、グループごとに旋律のつなげ方や重ね方を試し、今後は練習を積んでグループ発表をする予定とのこと。児童の創意工夫に満ちた発表になることが期待される。



【音楽づくり・創作】中学校・第2学年

題材名 「いろいろな音階を使って音楽をつくろう」

教材名：いろいろな音階を使った曲 生徒作品

指導者 足立区立西新井中学校教諭 今井 由喜

小学校と中学校で、題材名が「いろいろな音階を使って音楽をつくろう」と同じであるが、それぞれの成長段階に合わせた授業が展開され、大変興味深かった。中学校ではドリア旋法、フリギア旋法、ミクソリディア旋法の音階の雰囲気を感じ取りながら、その特徴を生かした創作活動を行っていた。音楽を構成する原理を体験的に学習するために、説明先行ではなく、音を出して試したり、音を聴いたりする活動を先行させるような指導は、生徒が主体的に学ぶためには効果的な方法であると感じた。また、ユニット（伴奏型＋メロディ）を使用した創作は、パターンが少なくても反復・変化・対照などの構成を工夫することで発展、展開させられるということに気付かされた。



【鑑賞】小学校・第4学年

題材名 「いろいろな民ように親しもう」

教材名：「ソーラン節」「南部牛追い歌」ほか

指導者 港区立赤羽小学校主任教諭 井上 奈々

既習の「ソーラン節」と「南部牛追い歌」を、クラス全員で『手拍子をしながら』歌う活動をきっかけとして授業が展開された。「ソーラン節」はとても気持ちよく生き生きと表現できていたものが、「南部牛追い歌」ではいつの間にか手拍子が止まり歌だけになってしまう。「どうして手拍子できなかったのかな?」「手拍子はやりづらい!」「同じ民謡なのにね・・・」こんなやり取りからそれぞれの楽曲が生まれたルーツへと子どもたちの心が動いていった。様々な映像を見たり聴いたりするうちに、両方とも効率よく働くための、または働く辛さを紛らわせるための仕事歌として生まれたことがわかった。ただし片方は大勢で力を合わせなければならない作業、もう片方は孤独で単調な作業。ここに子どもたちは、それぞれの民謡が生まれた理由と、拍節がある・ない、という理由を感じることができていた。まさに音楽の特徴と生活とのかかわりを感じとり、日本の文化、民謡に親しむ実践であった。



【鑑賞】中学校・第2学年

題材名 「世界の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して鑑賞しよう」

教材名：①「ピレンツェの歌」(ブルガリア) ②「アリロ」(グルジア) ③「パイェテ」(南アフリカ)

指導者 港区立六本木中学校主任教諭 勝山 幸子

ブルガリア、グルジア、南アフリカという3つの異なった国に伝えられる代表的な歌を、実際に自分たちで表現するところから授業がスタートした。女声合唱、男声合唱、混声合唱、発声の相違、主旋律とドローン、ソロと合唱の関わり、身体の動きと音の動きとの関わりなど、この段階から音楽を形づくっている重要な要素がたくさん登場している。何よりも生徒たちがとても楽しそうに、生き生きと表現しているのが印象的だった。

次にそれぞれの音楽的な特徴を『言葉』で表出させる。合唱の形態、声質、表現の方法、テクスチャの違いを明確にしたあと、「なぜその音楽が生まれてきたのか」、生徒同士で意見交換していく。そうすると、生徒たちは、3つの国が抱えてきた地理的・歴史的な背景や、宗教・信条・人々の生活・ものの考え方等が深く関わっていることに気づいていった。音楽の多様性を理解し、自分なりに解釈したり、価値を考えたりする活動は、世界の様々な音楽文化の豊かさに気付き、それぞれのよさを尊重するという、大きなテーマにつながる授業であった。



◆ 記念演奏 ◆

日時：平成26年11月7日（金） 9：40～
場所：府中の森芸術劇場（どりーむホール）

※「 」は演奏曲目



1 合同器楽合奏

品川区立小中一貫校伊藤学園（第1学年～第9学年）

「我が国や郷土音楽の伝統のよさを表現しよう」

～小中合同で、和楽器を取り入れた合唱奏～

わらべうた～民謡「こきりこ」「八木節」

～日本古謡「さくらさくら」 箏曲「六段の調」

三線「谷茶前」 長唄「勸進帳『寄席の合方』～雅楽「越天楽」～

◆指導者：角田美千子 教諭 清水 宏美 主任教諭



2 器楽合奏

連雀学園三鷹市立第四小学校（第6学年）

「曲想の変化を味わって演奏しよう」

～管楽器を取り入れた器楽合奏～

管弦楽組曲「惑星」より 「木星」

◆指導者：桑畑 多恵 主任教諭



3 合同合唱

目黒区立大岡山小学校（第5・6学年）

目黒区立第八中学校（第2学年）

第七・第九・第十中学校有志

「思いを伝え、受け継ぎ、心を合わせて 合同合唱」

小・中学生による合唱

「おぼろ月夜」「こいのぼり」「花」「夏の思い出」「赤とんぼ」「早春賦」

「冬げしき」「もみじ」

◆指導者：松田 和子 主任教諭 谷越 知世 教諭



4 混声四部合唱

調布市立第七中学校（第3学年）

「響きを感じ取り、表現を工夫して合唱しよう」

中学生による混声四部合唱

「風の咲く丘に」

中学生による混声三部合唱

「空を見上げて」

◆指導者：山崎 朋子 主幹教諭



◎フィナーレは、府中市立小・中学校の児童・生徒による素晴らしい合同合唱で幕を閉じました。

Information

全日音研中学校部会ホームページも是非ご覧ください。 <http://zennichionken-jhs.jp/>